

# 信 頼

津 守 真

I

現代のスペイン語圏の著名な教育学者、パウロ・フレールは、その著書（注）の中で「行為（action）を省察（reflection）することからことば（words）が生まれる」と述べている。私は、身体が語ることばについて考えていたとき、彼の書物に出会い、この文章に魅かれた。子どもは無意識の心の思いを身体の動きによって表現している。それに答えることから保育ははじまり、保育者の一日はほとんどその連続であると言っても過言ではない。その無意識の身体の動きの過程をどのようにしてことばにするかということとは、保育の学問で未だ解決されていない課題である。この文章が示唆することは、身体の行為

を何度も省察するところからことばが生まれるということである。省察するという語は、英訳では reflex という語が用いられている。つまり、繰り返し思い廻らすことである。

この著者は更に「行為の伴わないことばは、単なる言語主義、verbalism（あるいは、実体的なおしゃべり）であり、ことばの伴わない行為は単なる運動主義、activism（あるいは精神のない革命）である」と言う。つまり、身体とことばとの間に、省察という人間の精神の作用をおいている。

ことばは、個人の内部のことだけではなく、他人との対話である。パウロ・フレールは、更に「対話は、愛と、謙虚と、信頼を前提とする」と言う。愛は他者に対する積極的な関心である。謙虚は自分をすべてとしない、他人と自分を同じ床の上を歩む対等の人間としてみることである。信頼は相手の人間の中にある育つ力を絶対に信ずることである。絶対という語は、信じること以外には用いることはできない。

## II

これらのことは、抽象的なことではない。私の学校の六年生のKくんは、私と出会うと、ドボン、ドボンと声をかける。この子どもはいっぱい話したいことがあるのだが、言語にならない。私は、彼のことばを受け、少し変えて、ドカン、ドカンと答える。彼は大きなチューバを持って来て、私共の注目をひく。それから小さなトランペットや、以前に

使っていた玩具のラッパを持ってくる。私の妻は、これをKくんの成長のイメージだと言った。私は眼前の彼の姿だけを見ていて、長年にわたる彼との付き合いをそのとき視野にいれていなかった。

Kくんは、この二、三年、私より若い男性の職員や実習生を相手にする。相撲をとる。自転車に乗る。トランペットや、チューバを一緒に吹いたり、それを画用紙にかかせ、自分もそれをかく。以前は、校長室で私と丸をかいたり、そのことを介して私とかかわっていた。その膨大な量の彼の絵を、過日、展覧会で見たとき、同じものをかいていると思っていた彼の絵がどれも違っていたのに驚いた。いまはトランペットやチューバが彼の心にある。

一週間ほど前、ひとりの職員が、夏の合宿の話をしていたとき、Kくんが「つもりせんせい、いく？」とたずねたという。言語で会話することがほとんどないKくんが、こんなことを言ったのは、これも驚きであった。彼の心には幼いときからかわってきた私がいるのは明らかであった。

Kくんが二歳のとき、私はこの子の保育にエネルギーを注いだ。私はゆっくりと身体で応答し、人から見られることに極度に敏感なこの子の自我の形成にかかわってきた。そのころ、毎日いろいろな疑問がありながら、私はこの子が自分自身で育つことを固く信じようと思った。その信頼は裏切られていない。小さなできごとは絶えずあるが、この子は着実に自分で立ち、来年中学に進むその未来を志向している。人との間の親しいかわりか

つづくならば、大人の時期にまでこの子は成長しつづけるだろう。

### III

保育者は身体をもって、子どもの身体に応答する。その身体は、精神と社会をになつて  
いる。保育者は子どもと応答しながら、ときにより、心身ともに疲れ果てる。

私の学校の親を見ていると、そのことを強く考えさせられるときがある。ある子どもは  
一日中無理難題を言つて夜中まで親を眠らせない。ある子どもは学校に来る途中あちこち  
寄り道し、母親はあまり大変で学校について到達しない日もある。電車の中で些細なで  
きごとが、敏感な親子にとって想像を越える負担になっていることもある。大人を困らせ  
る行動をするのは、親のやりかたが悪いと親を責めることはできない。どうやっても大変  
な子どもがいることは現実である。私は、尊敬に値する親たちを沢山知っている。それは  
その大変さを自らの人生に負っていることから生まれるものであると思う。

ある場合には、現実の生活の大変さのあまり、施設に子どもを入れたく思ったとしても  
無理はない。

施設の側では、多くの場合、親ほどには、その大変さを自らの上に負うことはしない。  
施設の職員が極度に困らされるときには、皆の生活のし易さを考慮して、その子の行動を  
規制し、鍵をかけ、薬を使うことも起こる。そうしている間に、子どもは、その環境に順

応ずるよりほかなく、無感動になり、自らの人生を失ってゆく。私も職員もそうなつては大変だと考えている。この場所で、ひとりひとりが自分らしく生きられるようにと願う。私も施設の側におくとき、さまざまな現実に関感し、悩みを感じる。そして、共に考え、はたらく職員がいることは心強い。

三十六歳の男性のSさんは、私を見ると走って来て、「コーヒー」と言い、自動販売機に走ってゆく。私の財布から百円玉がなくなるまで、私はいつでもあげることにした。彼は「ガラスがわれたの　ガラスがわれたの」と言って歩き回っていた。Sさんは三十年以上前に、五歳のときにこの施設にあずけられた。その母親がSさんに会いに来た帰り、駅のベンチにひとり寂しげに腰掛けているのに出会った。その姿を私は忘れることができない。それから間もなく、この美しい母親は自らの命を絶つたと聞いた。Sさんにとっては、母親は、砕け散った薄いガラスの破片のように思われるのであろう。彼は、温かいコーヒーの缶を、両手に大事に抱えて歩いた。母親の肌の感触を思っていたのかもしれない。そのころ彼は鼻歌を唄ったり、楽しげに見えた。私が体育館で音楽をかけていると、私の首に両手をまわして跳びはねることもあった。最近、私は毎週Sさんと会うから、そんなに毎回コーヒーのお金をあげなくても、むしろ小遣いをあげるようにすればよいのではないかと考えた。彼が来ても私は断ることがふえた。そして間もなく気がついたのだが、Sさんの楽しそうな表情が少なくなった。彼が私にコーヒーを求めるのは、コーヒー

そのものというよりも、いつでも彼にこたえる私の気持ちがあることは明らかであった。人との関係に敏感なSさんは、私に捨てられたと感じたのかもしれない。この関係を回復するのに、もう一度、私自身原点に立ち返り、心をこめてSさんとかかわるようになりたいと思う。

(愛育養護学校)

注 Paulo Freire : Pedagogy of the Oppressed Continuum, New York 1970、1993

一九九五年に日本で開催されるOMEPP世界大会の基調講演者の一人である。

